

ナシヨナリズム／エスノ・ナシヨナリズム考

木村 雅 昭

一

こんにちにおけるナシヨナリズム、エスノ・ナシヨナリズムは、複雑な政治的、経済的要因によって引き起されたものである。一九世紀以降、世界の隅々にまで波状的に押し寄せた産業化の波によって、伝統的な農業社会が動揺するとき、そこにはナシヨナリズムを育む契機が働いていた。第一に、伝統的な農業社会にあって、人々が住まう環境は固定的で、人は父親から受け継がれた生業に従事する一方、彼をとりまく道德世界も、遠い過去から受け継がれてきたものである。したがってそこでの生活は、古くからのリズムにしたがって繰り返される一方で、なんらかの問題が生じたとき、それに対する答えは、総じて父祖伝来の道德や慣習のなかに用意されていた。

もとより、原始的な段階にある人々といえども、人間が人間である限り、既存の価値体系にトータルに埋没しえないものである。人間はどこから来てどこに行くのかという問題は、文明の発達のいかんにかかわらず、人間が人間である限りつきまとう問題である。このように人間には、システムに還元し得ない「病める部分」が必然的につきまとうもの、しかしそうした問題は、ときに人々の脳裡を去来するだけで、一般人の場合、必ずしも持続的な関心を引きつけはしなかった。というのも彼等の大部分は、「宗教的に音痴」(マックス・ウェーバー)とも言うべき人々であり、

そうした根源的な問題に頭を悩ますよりも、日々の生活の糧をえることに、その精力の大半を費やすこととなったからである。

それに対して、産業化の進展とともに父祖伝来の生活世界Ⅱ村落から切り離され、町に移住した人々にとって、その日常生活は質的に異なったものとしてたち現われてくる。なによりもまず昨日まで彼らを取り巻いていた確実な生活世界に代わって、あらたに身を置く世界は、彼らになじみのない世界であり、そこは見知らぬ人々が激しく行き交う世界である。また彼らをとりにくく道徳世界に着目しても、病を癒す祈祷師もいなければ、日々の難問に解答を与える村の長老もいず、さらに人々の日常の行動を規制する道徳や慣習も、もはやかつての自明性を兼ね備えてはいなかった。この意味で、農村から都市へと移住してきた人々にとって、日々の生活は物質的にも精神的にもはるかに不安定なものである。そしてそうした不安定さが昂じてゆくとき、人々は改めて自らの来歴を問い直し、自分の帰属対象を自覚的に捜し求め、さらに自分自身を含めて自らが帰属する集団が担うべき運命に対して切実な関心を抱くことになるであろう。

都市に移住してきた人々を見舞う以上のような状況は、いうまでもなく宗教的な運動に恰好の土壌を提供するものである。じじつキリスト教の主たる担い手は、その初期においては遍歴手工業者、中世から近世初頭にかけても都市の手工業者であり、さらに砂漠の宗教というイメージで捉えられるイスラームも、その主たる基盤は都市である。⁽²⁾この意味で、農村や砂漠ではなくて都市こそが高度宗教の培養基をなしていたが、しかし世俗化が進んだこんにち、宗教的なものに代わって世俗的な価値と集団とが人々の関心を引き付けるようになってきた。

「伝来の村落や家庭生活は、比較的静かで安定した生活を提供した。そこでは人はそれぞれ高下の別はあるものの、⁽¹⁾年来の絆と慣習に基礎づけられた地位を享受するか、少なくともあるがままの自分が受け入れられ、自分の占めるべき位置も知っていた。彼がなんらかの決定を下さなければならないとしても、その答えは少しでしかありえず、しかもそ

れらは旧来の主人、領主、司祭から与えられる権威あるものであった。しかし比較的固定された古い社会が解体するにつれて、旧来の忠誠心も伝統も解体した。都市と産業の目まぐるしい動きと不安定さの中に引き込まれるにつれ、人々は、先祖たちが享受していた安定と地位とを奪われてしまった。様々な世界を渡り歩くに際して、彼らには尊敬すべき権威が欠如しており、心なぐませる神話もはやなく、したがって容易に状況に順応し得ず、抑圧感と不安感に苛まれることとなった。それゆえに彼らは、核となるもの、自分が帰属しうるなものかを求めた。それと同時に、新しい科学と新しい自由主義的、民主主義的な教義とは、いずれにしても文字が読める人には、より確かで、自由で、幸福な生活を保障するように思われた。こうしたことはいかにして可能であったのか。多くの人々にとって国民とナシヨナリズムは、未来への道を提供するように思われた。それらに帰属し、参画することによって人々はなんらかの地位を得、いくばくかの安心を得、そして希望を得ることもできた。したがって彼らの多くがナシヨナルな神々に忠誠を誓い、そのうちのいくばくがそれらを崇拜することとなったとしてもなんら不思議でない⁽³⁾」とB・C・シェーファーは述べている。

ここでシェーファーが強調していることは、従来の生活様式が動揺・解体したところで、それらに代わって人々に帰属感を提供することによって人々のアイデンティティ・クライシスを解決する上で、ナシヨナリズム・イデオロギーが果たしてきた役割、これである。また都市の喧騒のなかで自分たちとは異なる言語を耳にし、自分たちと異なる肌の色、容貌を目の当たりにするにつれ、自分たちの民族的な関心がいやがうえにも掻き立てられ、さらに都市での激しい生存競争を勝ち抜くにあたって同郷のものたちが団結するようになるとき、そうした関心はより確固たるものへと仕立て上げられてゆくこととなったであろう。

そればかりでなく、産業化そのもののうちにもナシヨナリズムを育てゆく構造的契機が秘められていた。アーネス

ト・ゲルナーによれば近代の産業社会とは、流動的な分業社会であり、そこでは人々は様々な職種・役割を次々とこなしてゆくことを運命づけられている。そしてこうした人々の動きがスムーズになされるためには、人々の間に共通の文化が共有されていることが要請されていた。じじつ近代になって国民教育が開始され、しかもそうした教育は共通の教科書を用いてなされることとなるが、それは同質的な文化を形成する上で不可欠な役割を果たすものである。それと同時に、国民教育の前提として、標準語が整えられ、しかもそれらが確かな文法を備えた書き言葉へと仕立て上げられるとき、そのことは近代産業社会で人々が様々な職種・役割を渡り歩く途上で、不特定多数の人々とコミュニケーションをなす上で不可欠な媒体の形成を意味していたのである。

したがって国民教育の過程で、愛国心を涵養するために国民文化的伝統が掘り起こされ、それを生徒たちに注入することになるが、国民教育の第一義的な役割は、ゲルナーによれば、真性の国民的文化を体現した人間を創造することにあるのではない。それどころかそこで注入される国民文化的伝統なるものも、取捨選択されたものであり、伝統の「掘り起こし」と同時に、伝統の「忘却」がなされる以上、そこで形成されてくる国民文化なるものも、多分に恣意性を帯びたものである。その一方でこのように形成されてくる文化的同質性は、産業化が進展し、第一次産業に対して、第二次、第三次産業の比重が高まってゆくにつれ、より必要とされるようになるであらう。農業労働者の場合、その労働は沈黙のうちになされる単純作業である。したがって農業労働者と雇傭主＝監督者との言語が異なっていたところで、大した障害となるものではない。それに対して工場労働者の場合、その労働はより複雑化し、したがって作業工程に対する手引き書は不可欠であり、監督者と労働者とのコミュニケーションもより頻繁に必要とされるようになってくる。さらに第三次産業の場合、労働過程そのものが言語を介してなされる意味伝達という性格を帯びるようになる以上、言語や文化の同質性は、仕事を円滑にこなす上でより不可欠となってゆくであらう。

「その成員は流動的であり、かつそうでなければならず、ある活動から次の活動へ移る用意を常にしておかなければならない。そして、次の新しい活動と職業の手引書や仕様書とについていけるような全般的な訓練を積んでいなければならない。仕事を進めていく上で、彼らは数多くの他人と絶えずコミュニケーションを図らなければならない、しかも、その他人との間には事前の面識がないことも多いためコミュニケーションは明示的でなければならず、コンテキストに依存することはない。彼らはまた、書面上の、非個人的な、コンテキストにとらわれない、関係各位型のメッセージによって意思疎通できなければならない。したがって、これらのコミュニケーションは、共有され標準化された同一の言語的媒体と筆記文字とによって成り立たなければならない。……産業社会とその成員とにとって、これらのことすべてが含意しているものは何であろうか。端的に言えば、個人の雇用能力、尊厳、安寧、自尊心といった事柄は、大多数の人々にとって彼らの教育、次第となる。彼らが教育を受けた場としての文化の限界がまた、彼らが道徳的かつ職業的に呼吸しうる世界の限界でもある。人間の教育こそが最も高価な投資であり、事実上その人にアイデンティティを与えるものとなる。近代人の忠誠心は、彼が何と言おうと、君主や祖国あるいは信仰ではなく、文化に向けられる⁽⁴⁾」とゲルナーは書いている。

したがって近代国家の本質は「暴力の独占」ではなくて、むしろ「教育の独占」にこそ求められるべきものである。この意味で義務教育を介して育まれてゆく共通の国民文化は、近代産業社会を円滑に運営する上で必要な文化的インフラストラクチャーともいえるべきものである。それゆえに産業化の波が伝播してゆくにつれ、ナショナリズムが世界各地で頭をもたげてくるが、しかしナショナリズムの歴史を概観するとき、もとよりそこには、そうした機能的側面につきぬ要素がビルトインされていた。じじつ無名戦士の墓が多くのもので人々の崇拜する対象となっているように、国家に対する忠誠は、神々への信仰を押しつけて、人々の生と死に意味づけを与える拠り所になっている。またナショナリズム

が近代産業社会と切っても切れない関係にある一方で、当のナショナリズムが暴走し、絶望的な戦争へと人々を駆り立てるとき、国家の滅亡と産業の破壊に至りつくことも決して稀でないであろう。

その一方でナショナリズムが頭をもたげてくる過程で、忠誠心が注ぎ込まれることによって父祖伝来の国家にダイナミックな力が付与される一方で、それを破壊する分裂的な契機も頭をもたげてきた。というのも国家を構成する人々の文化、とりわけ言語が複数存在するとき、国家語とは異なる自己固有の言語に依拠して、新たな国民国家を形成せんとする動きが台頭してくることとなったからである。周知のようにハプスブルク帝国や、オスマン・トルコ帝国は、一九世紀が進むにつれて幾多の革命や反乱に見舞われ、ついには瓦解してゆくこととなるが、その原因は被支配者に渦巻くナショナリズムに求められるべきものである。またいま一つの多民族帝国Ⅱロシア帝国にあっても、二月革命で帝政が倒れるや、非ロシア人のナショナリズムが遠心力となって解き放たれ、旧体制を破壊する上で無視し得ぬ力を発揮した。

「一九一八年の春までに、世界最大の国家は大小無数の相重なり合う権力体へと分解してしまった。そのいずれもは自分の領土に支配権を主張する一方で、相互に制度的な繋がりもなければ、運命共同体意識によって結びあわされてもいなかった。数か月の間にロシアは、自治的な公国の寄せ集めであった中世初期に政治的に逆戻りしてしまった。最初に分離したのは周辺部の非ロシア人達であった。ボルシェヴィキのクーデタ「一〇月革命」の後には、少数民族が一つまた一つとロシアから独立を宣言したが、それは民族的な願望を実現するためであると同時に、ボルシェヴィズムと無気味に頭をもたげてきた内戦から逃れるためでもあった。……分解の過程は周辺部に限られるものではなかった。遠心的な力は、各州が一つまた一つと中央からの独立を宣言し、独自の道を歩み始めるにつれて、大ロシア内部にも現れた。……その結果はカオスであった⁽⁵⁾」と、リチャード・パイプスは書いている。こうした状態は旧体制を残りくまなく

一掃せんとしていたボルシェヴィキにとって、必ずしも不都合なものではなかったが、他面では彼らが権力を確立してゆく過程で数々の困難をもたらした。そうした困難の一端は、ウクライナ、カザフスタン、アルメニア、アゼルバイジャン、グルジアの制圧⁽⁶⁾が、秘密警察や赤色テロを駆使した凄惨なものであったことに、如実に現れている。つまりプロレタリア・インターナショナリズムを標榜したこの革命にあって、そのお膝元ではナショナリズムが絡まりあっており、同時にまたそこで権力を奪取したボルシェヴィキ政権が赤色テロルに訴えかけることとなったのも、その原因の一端は民族主義者に対する弾圧にあったのである。

注

- (1) マックス・ウェーバー、武藤一雄他訳『宗教社会学』創文社、一九七六年、一〇一―一三ページ。
- (2) ハミルトン・ギブ、加賀谷 寛訳『イスラム文明』紀伊國屋書店、一九六七年、三一―七ページ。
- (3) Boyd C. Shafer, *Faces of Nationalism: New Realities and Old Myths*, New York and London, 1972, pp. 187-188.
- (4) アーネスト・ゲルナー、加藤 節監訳『民族とナショナリズム』岩波書店、二〇〇〇年、五九―六一ページ。
- (5) Richard Pipes, *The Russian Revolution 1899-1919*, London, 1990, p. 514.
- (6) ウクライナでは、第一次大戦でのドイツの降伏後、ウクライナ・ナショナリスト、コサック軍団、共産主義者、白衛軍が血みどろの抗争を繰り広げており、当の共産党幹部の間でも反モスコ感情が根強かったため、秘密警察に依存し、苛酷なテロを行うこととなった。またタシケントでは一九一七年一月にボルシェヴィキが政権を掌握したものの、住民の九七パーセントを占めるイスラム教徒が政権から排除されていることを機縁に内戦が勃発した。戦いは長期化し、赤軍による容赦なき殺戮を経て、一九二〇年の末に決着をみた。他方、コーカサス地方、すなわちアルメニア、アゼルバイジャン、グルジアをめぐる状況は、複雑な様相を呈している。すなわちグルジアを支配したメンシェヴィキは、土地改革と国有化で成果をあげ、内外から高く評価されていたため、ボルシェヴィキにとってこの地の制圧は急を要したものの、他面ではトルコやイギリスの戦略的な利害が絡まり合っており、微妙な外交的駆け引きが必要とされた。一九二〇年四月、赤軍はまずアゼル

バイジャンに侵攻して赤色テロを繰り返しかえした。そしてその翌年の二月のグルジアの武力制圧に先立って、この地のボルシェヴィキを蜂起させ、それを援助するという口実のもとに侵攻することとなった。またこの時代、アルメニアとトルコとの間には領土をめぐる争いが繰り返されておき、侵攻してくるトルコ軍を迎え撃つという口実のもとにボルシェヴィキがアルメニアに侵攻することとなったのである。(Richard Pipes, *Russia under the Bolshevik Regime 1919-1924*, London, 1994, pp. 152-165)

二

こうしたなかであって西欧諸国は、少なくとも一九世紀後半以降、必ずしも深刻な民族問題を経験することはなかったが、しかしこの地でも二〇世紀の後半になって、エスノ・ナショナリズムが新たに頭をもたげてきた。というのも他の地域に先立って国民国家を形成したこの地にあっても、国民国家の建設は必ずしも同質的な国民文化の形成を意味してはいなかったからである。

ユージン・ウェーバーの古典的な研究は、フランス革命でナショナリズムの洗礼を受け、その過程で言語的同質性を確保せんとする努力がなされてきたにもかかわらず、一九世紀の後半にいたってもなお、それらが実現されていないことを明瞭に示している。ウェーバーによれば、当時のフランスにはその周辺部で俚語パトロと呼ばれる方言が根強く残存しており、そのうちにはブレトン語やオック語のように、フランス語——それはパリとその周辺の方言から創られた——とは異質な言語も含まれていた。したがって普仏戦争での敗北をうけ、第三共和政時代に再び政府が国民意識の涵養に積極的になり出し、その一環として文化的同質性の確保に着手したとき、多くのところで思わぬ障碍に出くわしたとい

う。例えば南フランスのオック語地域で、小学校でオック語ではなくてフランス語で児童の教育に乗り出したとき、当の小学校教師にはフランス語と同時に土地の言葉に通じていることが要請されたのは、そのなよりの実例を提供するものである。

しかしながらその一方で言語的統一が現実のものとなるにあたつては、地域住民の自覺的な努力が介在してもいた。それは地域の若者、とくに少女、さらに社会的上昇志向の強い人々に見られたところの、俚語よりもフランス語を尊ばんとする態度に典型的に見出されるものである。また一九世紀を通じて進行した産業化は、文化的、言語的同質化の方向に作用した。それはまさにゲルナー的論理にしたがつて生起したものである。同様にこの地域が全国的なネットワークにより緊密に組み込まれるようになるにつれ、フランス語の知識はこの地の商人、企業家が成功をおさめる上で不可欠となつてくる。その一方でオック語の場合、一九世紀の中頃までに、文法書を備えた書き言葉へと成長をとげている⁽⁷⁾。かつたことも、この俚語がフランス語に飲み込まれていったいま一つの原因をなしているであらう。

いずれにせよ以上のような状況には、フランスにおける同質的な国民形成が、長く困難な過程であつたことが示されている。それは絶対主義の時代から大革命を経て、営々と成し遂げられてきた試みの最終段階とも目されるべきものである。

それに対して同質化の努力がフランスほど熱心になされてこなかつた他の国々にあつては、周辺地域の独自性はより顕著であり、しかも場所によつて、時代とともにより尖鋭に意識されるようになってきた。アンソニー・スミスによれば、それは産業化のさらなる進展とともに生じてきたものである。なかんずく二〇世紀後半に周辺地域が国民経済へとより緊密に統合されるにつれ、中心地域の繁榮が周辺地域の犠牲の上に成り立っているという意識が昂じてきたがためである。またたとえ経済的統合に伴つて周辺地域が豊かになつた場合でも、当の豊かさが中央の経済政策、福祉政策の

賜物であり、そしてこれの政策が中央集権的で合理的な官僚組織に依拠してなされるとき、そこにも周辺地域の反発を生み出す契機が秘められているであろう。というのも周辺地域の富裕化には、たとえ中央の援助がなくなるとも自立可能であるといった意識を人々の間に培ってゆく契機が秘められていたからである。また当の豊かさそのものも、伝統的な共同体が合理的な官僚支配によって掘り崩される危険と引き換えにもたらされたものである。なおその上に教育の普及を通じて中心地域の文化が浸透する一方、マスメディアを介して文化的な同化が押し進められるとき、自己固有の伝統を守護せんとする動きにより拍車がかかることとなるであろう。⁽⁸⁾

それはこんにちの日本において伝統的な地域文化を維持、復興せんとする動きが、画一的な中央の文化によって地域の個性が掘り崩されてゆくのに触発されて頭をもたげてきたのと軌を一にするものである。またそうした動きが、当該地域の人々よりむしろ東京のイニシアチヴのもとで押し進められ、しかもその際、地域文化が商品へと仕立て上げられ、商魂たくましく売りに出されるといったことも、しばしば経験するところであろう。

それと同様、トレバー・ローパーによれば、こんにちスコットランドの民族衣装を代表するキルトは、必ずしもこの地に昔から伝わってきたものでなく、一八世紀後半の産物である。しかもそれをデザインしたのが、スコットランドではなくてイングランドの織物業者であり、彼が考案したのは、スコットランドの人々がもとと身につけていたもの——それは肩掛けとスカートを一緒にしたものであった——より、洗練されたものである。⁽⁹⁾

またウェールズに関しても「一八世紀と一九世紀初頭のウェールズの文化生活を眺めると、あるパラドックスに驚かされる。一方では古来の生活様式が衰え失われたのに対し、他方ではウェールズ的な物への関心がかつてなかったほど高まり、また強い自己意識に基づき、それらを保存し発展させようとする活動が行われたのである」⁽¹⁰⁾と指摘されている。こうした指摘に見られるように、一八世紀にウェールズ固有の文化や言語に対する関心が高まり、ウェールズ語で

の書籍の出版、伝統的なバラードの復刻に着手されることとなるが、それはイングランドからの圧倒的な影響によってウェールズ固有の文化が衰退してゆくことに対する危機感に発するものであり、しかもこうした文芸復興を担ったのは、ロンドン在住のウェールズ人である。

それに加えてこの地のイングランドへの統合が進展してゆくにつれ、経済的な利害関心も加わるようになってきた。というのも経済統合の進展とともに、この地に設立される企業が増加してゆくこととなったが、当の企業にウェールズ人が多くの場合、労働者として雇われる一方、経営者の少なからぬ部分がイングランド人によって占められることとなったからである。それは階級的な反目と文化的な反目とがオーヴァー・ラップした状況にほかならない。またたえ、職場が民族的に分断されていなかった場合でも、イングランドとくらべてウェールズが経済的に貧しくて、失業も深刻であるとき、イングランドに対するウェールズの不満はより昂じてゆくこととなるのも自然のなりゆきといえよう。

もっともウェールズの政治は多分に複雑な軌跡を描いている。以上のような状況が生じてくるのは一九世紀中頃以降のことであるが、ウェールズの不満はさしあたっては自由党、ついで労働党支持へと流れ、必ずしも明確な反中央意識へと結集してゆきはしなかった。こうした動静に決定的な変化が生じ、彼らの不満が反中央へと転化してゆくのは、一九六四年に労働党が政権を奪取したにもかかわらず、自分たちの経済状態がよくなるのを目撃してのことである。しかも労働党が——先行した保守党と同様——中央集権的な官僚制に依拠して社会経済政策を実践していた以上、彼らの不満はより昂じてゆくこととなったのである。⁽¹⁾

「近時におけるケルト・ナシヨナリズムの尖鋭化は、結局のところ官僚主義的資本主義の原則に対する執拗な批判と解釈することができるであろう。かかる原則は大学から国家等、そのサイズが異なるものの、様々な組織で批判にさら

されるようになってきた。このように組織化された体制においては、普遍的とみなされた規準にしたがって、社会的に異質な集団相互間で財の配分がなされるときに、不満が生じてくるものである。……官僚的行政のもとでは、特権を持たない集団が支配的な集団と同等の財を獲得しうる可能性はほとんどない。それゆえに特権を持たない集団は、自分たち自身にかかわる問題に目が向けられ、資源配分の過程で考慮されるようになるためには、政策決定が『地方化』されなければならないと主張する⁽¹²⁾」とマイケル・ヘクターが指摘するとき、それは、ウェールズに典型的に妥当するものである。

もっともいま一つの周辺地域スコットランドは、イングランドと比較して必ずしも経済的に遅れていたわけではない。またスコットランドは独自の歴史的伝統を誇っていたにもかかわらず、自らの言語を近代にいたるまで保持していたわけでもない。したがってスコットランドにおいては、ウェールズと比較して文芸復興運動が強力に推進されること⁽¹³⁾がなかったが、にもかかわらず二〇世紀に入って自治運動、独立運動が次第に勢いを増してきた。それは一七〇七年のイングランドとの合邦が、一方による他方の征服でもなければ併合でもなく、対等の合邦であったというスコットランド人の意識に由来するものであり、福祉国家化の進展とともに経済や社会のいたる所に国家が介入してきたのに伴って、そうした意識が研ぎ澄まされてきたためである。しかもこうした国家が官僚主義的合理性に依拠し、普遍的・一般的原則に則って運営されるとき、自己固有の伝統を守護せんとする意識は、より尖鋭化してゆくこととなった。

二〇世紀においては、社会・経済的な枠組みに対して、教会や法律や地方自治といった「一七〇七年の」合同法によって入念に保護された社会的諸制度よりも国家の方が大きな影響を与えるようになった。スコットランド担当相とスコットランド省は、政府の諸委員会でスコットランドの存在を指し示し、利益を増進する手はずとなっていた。しかしながら第二次大戦後、とりわけ一九六〇年代に、このシステムは信頼性のギャップの拡大に直面することとなった。こ

のシステムは誰の目に留まるわけでもなければ、民主主義的な統制に服することもなく、さらに中央管理経済のもとではスコットランド省が、スコットランドのために別個の政策を展開するにも限度があった。そしてそのことがロンドンに基盤を置く政府に対する疑念を呼び覚まし、スコットランドに昔からある一連の不平を甦らせた。またそれは、自治を求める要求を喚起することとなったが、この自治はイングランドの支配下ではなくて、合邦のパートナーシップの効果的な復興を基盤とするものであった⁽¹⁴⁾とD・N・マッキーヴァーは書いている。

ここには国家機能の拡大と中央集権化という、二〇世紀の国家につきまとう趨勢が、まさにそれゆえに地域の不満をかきたて、エスノ・ナショナリズムを育んでゆくという状況が端的に現れている。この意味でそこにも、先進資本主義社会に一般の趨勢が投影されていたが、さらにこうした動きを加速させる上で、国家に期待される役割がこの間に変化したことも無視し得ぬ影響を及ぼしていた。というのも以前には国家の政治的自立のみならず、経済的、軍事的な自立も要求され、独立を志向するいずれの集団にもこれら三分野での自立可能性が求められていたのに対して、国家を取り巻く環境は質的に変化してきたからである。

じっさいのところ経済的な相互依存が深まる一方、軍事技術も飛躍的に発達したこんにち、経済的な自立はもはやかつてほどの意味をもたず、軍事的自立にいたっては、アメリカ以外いずれの国家も実現不可能である。そしてこうした経緯は、政治的独立をめざす集団がこの間に飛躍的に増加した原因をなしていた。例えばイタリー独立の立て役者マッツイーニが、一九世紀の中頃に独立した諸国民からなるあるべきヨーロッパの地図を描いた際、独立国の数はわずかに一二を数えるのみである。それに対してウィルソンの「民族自決の原則」が適用されて多くの新生国家が誕生した結果、ヨーロッパの独立国の数は現実⁽¹⁵⁾に二四に増加した。さらに一九八〇年の段階で、地域主義運動だけでもヨーロッパにおけるその数は四二にも達しており、そしてそのうちのいくばくかは冷戦終結後、その目的を達することに成功し

た。というのでも冷戦が終結するにつれ、国際政治における軍事力の役割は——たとえ一時的にせよ——後景に退いてゆくこととなったからである。もつとも冷戦の終結とは、旧共産圏ブロックの解体を意味しており、そこにはモスコの共産党の鉄の支配から解き放つことによって、中・東欧に新しい国家を誕生させてゆくベクトルが立ち働いている。またその際、ナショナリズム、エスノ・ナショナリズムが、新生国家を基礎づける上でまことに便利なイデオロギーであったことは、後述するとおりである。⁽¹⁶⁾しかしこうした動きは、中・東欧に限られたものではなく、西欧——さらにはその他の地域にも——広くまたがるものである。そしてその背景には経済的な相互依存の増大と国家の軍事的自立の可能性という要因が介在していたといえよう。

注

- (7) Eugene Weber, *Peasants into Frenchmen: The Modernization of Rural France, 1870–1914*, Stanford University Press, 1976, pp. 67–94. なおオック語は、南フランスからバレンシアにかけて広まっていた言語であり、一三世紀以前には行政言語としても使用されていたが、北フランスからの影響が強まり、さらに一五三九年の「コトレ言語令」によって、行政言語としてフランス語の使用がフランス全土で義務づけられるにつれて、大きな打撃を受けることとなったのである。もともと一九五一年には学校でのオック語の使用が認められることとなったが、そのときにはオック語の実用性はなくなっており、この措置はオック語の復興に寄与することがなかった。なおアラゴン、カタロニア、ラングドックのどれか一つを中心に国家建設がなされておれば、オック語はフランス語とならばいま一つの言語として残る可能性があっただろうが、これら三中心間のライヴァル関係がそうした国家建設の可能性を断ち切ったとスタイン・ロッキンとデレク・アーウィン⁽¹⁷⁾は述べている。Cf., Stein Rokkan and Derek Urwin, *Economy, Territory, Identity: Politics of West European Perspectives*, London, 1983, pp. 96–99.

- (8) アンソニー・D・スミス、巢山靖司監訳『20世紀のナショナリズム』法律文化社、一九九五年、二四〇—二四三ページ。

- (9) ヒュー・トレヴァー・ローパー、梶原影昭訳「伝統の捏造——スコットランド高地の伝統」、エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊國屋書店、一九九二年、三一—四〇ページ。

- (10) ブリス・モルガン、前川啓治・長尾史郎訳「死から展望へ——ロマン主義時代におけるウェールズの過去の探求——」、ホブズボウム・レンジャー、前掲書、七三ページ。
- (11) Michael Hechter, *Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development, 1536–1966*, University of California Press, 1975, pp. 143–165.
- (12) *Ibid.*, p. 310.
- (13) スコットランドにおける文化的同化は、ローランド (Lowland) に始まり、そこを拠点にハイランド (Highland) へと進んでいった。すなわちハイランドの住民はゲール語を使用していたものの、既にして一三世紀に英語はローランドの住民の使用するところとなっており、ローランドを拠点に次第にハイランドへと拡大してゆくこととなったのである。こうした同化がいかに進行していたかは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ゲール語とゲール文化の復興を目指す運動が登場してきたものの、人々の支持を獲得することができなかったことに如実に現れているであろう。こうした復興運動に関しては、cf. H. J. Hanham, *Scottish Nationalism*, Harvard University Press, 1969, pp. 123–126. なお、同化が達成されたもののスコットランドは一段下に見下されており、スコットランド人が植民地に大挙して出かけてゆくこととなったのも、そこに一因がある。
- (14) D. N. Maciver, “The Paradox of Nationalism in Scotland”, in Colin H. Williams ed, *National Separatism*, University of Wales Press, 1982, p. 133.
- (15) E・J・ホブズボーム、浜林正夫他訳『ナショナリズムの歴史と現在』大月書店、二〇〇一年、三六―三九ページ。
- (16) なお付言すれば、こうした過程で民衆の意志に対する問いかけがなされるが、それを人民意志の政治への反映と見るならば、そこには近代という時代に生じた大きな政治変動の今日における胎動を見て取ることができるであろう。それはいうまでもなくデモクラシーの進展がナショナリズムを生み出すという契機にほかならない。そればかりでなくW・コナーによれば小国の独立も、冷戦以後に限られるものでなく、一九〇五年のノルウェー、一九三七年のアイルランドの独立に見られるように、一九世紀から二〇世紀にかけて見られた一般的な現象であり、そしてその背後にはデモクラシー原理の拡大による民族自決の原理の深化・発展があったのである。Walker Connor, *Ethnonationalism: The Quest for Understanding*, Princeton University Press, 1994, pp. 169–174.

三

以上にみてきたようにナシヨナリズム、エスノ・ナシヨナリズムは、近代世界に生起した政治的、経済的、社会的變動に規定されて登場してきたものであったが、しかしそれが解き放つエネルギーの暴力性は、もとより多様である。例えば中・東欧と比較して西欧では——バスクやアイルランドを例外として——運動は概して平和的な様相を呈している。そしてその原因を考察してトム・ネアンは、産業化の初期の段階と後期の段階との間に見られる違い、さらには産業社会を取り巻く農村社会の性格の違いに、それを解くカギを見出していた。

ネアンによればナシヨナリズムは——そしてエスノ・ナシヨナリズムもまた——伝統的な社会的枠組みから解き放たれた人々を、近代社会へと統合してゆく上で不可欠な機能をはたしていたが、しかしこの農業社会から産業社会への転換は苦難に満ちた過程を意味していた。したがって産業化の途上にある段階でナシヨナリズムが力を発揮するのも、こうした苦難に慰めを与えんがためであり、ナシヨナリズムが解き放つエネルギーの強烈さは、その実、苦難の大きさに対応するものである。それに加えてナシヨナリズム・イデオロギーを構成する諸要素、すなわち領土¹⁷、共同体、父祖伝来の遺産、共通の経験、血、純粹さ、外からの汚染に対する警戒といったものは、いずれも農村共同体の中で多分に閉鎖的な生活を営んできた人々の経験と密接な関連を有していた。換言すれば産業化の初期の段階では、未だこうした農村的価値が失われていないゆえに、そこで展開されるナシヨナリズムには強烈な力が秘められている。それに対して産業化が進展し、土とは無縁な都市空間で、自らの私的世界に埋没し、他者との濃密な繋がりを煩わしく思う一方、祖先にも無関心な、豊かな国の人々にとって、ナシヨナリズムを構成する信仰簡条は、必ずしも魅力を持ちえないであろう。

この意味でネアンにとってナシヨナリズムとは、近代の都市的な現象ではあるものの、そこには農村社会とその価値感情が色濃く投影されている。それと同時に、都市をとりまく農村社会の構造も、ナシヨナリズムの性格を形成するにあたって大きな影響を及ぼしていた。例えばバスクで、分離独立運動がテロ活動を伴って激しく展開されることとなったのも、その農村社会が緊密に組織されており、そこで培われた「名誉」の意識がナシヨナリズムに投影されたがためである。それに対してカタロニアでの運動が、総じて平和的であったのも、ここでは一切の農村的な繋がりを欠き、もっぱら都市を基盤とする経済団体、政治団体によって担われてきたがためである。⁽¹⁸⁾ それと同様、スコットランドと比較してアイルランドのナシヨナリズムが戦闘的であった背景も、同じ要因に求めることができるであろう。ネアンによればスコットランドのローランド地方はイングランドと同様に、過去に農業革命を経験した結果、古き農村社会が一掃された地域である。それに対してアイルランドにあつては、一九世紀の土地改革が地主勢力を後退させた結果、小農が強い結束力を誇る農村社会が形成され、そこで培われた農村特有の生活感情がナシヨナリズムに流入したため、ナシヨナリズムはいきおい過激化してゆくこととなったのである。⁽¹⁹⁾

したがって産業化が緒についたばかりの第三世界で、(エスノ)ナシヨナリズムが戦闘的な様相を呈することとなるのも、同じ要因に由来するものである。それと同様、周知のように旧ユーゴスラヴィアで冷戦終結後、激しい民族抗争が繰り広げられてきたが、そこにもこの地域に特有の農村の社会構造が影を落としていた。それは一人の家長のもとに既婚の息子たちとその家族が集まって住むところの、ザドルガと呼ばれる父系の複合家族からなるものにほかならない。そしてこのザドルガなるものが形成されてくるにあたっては、苛酷な自然条件への対応という一般的な状況の他、オスマン・トルコとハプスブルクの両帝国とがこの地の支配をめぐる相対峙したという、この地方に特有の歴史が大きくあずかっていた。たとえば長らくオスマン・トルコの支配下に置かれていた地域では、役人や彼らと結託した上層

階層の抑圧的支配から身を護るため、民族的なつながりと同時にザドルガの復活が見られたという⁽²⁰⁾。その一方でハプスブルク側にあっても、オスマン・トルコから帝国を防衛するために「軍事国境」が設置され、そこに屯田兵として「国境守備隊」が配置されたとき、それもまたザドルガを存続させてゆくこととなったのである。

「多くの成人男性を抱えた大きな世帯は防衛任務を果たすと同時に土地を耕すのにも都合がよかった。いわゆる『家^{ハウス・フミナ・ニダ}団体』のシステムはそれゆえここでは国家の側から助長された。それがこの地方でザドルガが長く維持されるための重要な要因だった。全般的に防衛任務はザドルガに大きな意味を持っていたらしい。バルカン地方の国家制度の弱さが高度な自己防衛体制を必要不可欠にしていた。近代に至っても多くの地方で血の復讐義務が維持されていたことはこの地方の状況をよく表している。成人男性の数は家共同体の防衛力にとって重要だった。男らしさの思考がこの地方の伝統で非常に高い価値をもつ理由も、戦闘能力の重要性から説明できよう⁽²¹⁾」と「軍事国境」地域に関して歴史人類学者ミヒャエル・ミッテラウアーは書いている。彼がこのように書いた一九九〇年にはバルカンでナショナリズムが無気味な高まりを見せてはいたものの、いまだ流血の惨事に見舞われてはいなかった。しかしその後、ナショナリズムがこの地を席卷したとき、こうした社会的条件は凄惨な状況を引き起こすこととなったのである。

「兵士としてクライナに入植し、ディナル山脈の自然によって人格を形成されたセルビア人は、武器に対してきわめて強い親近感をもつようになった。この地域の伝統の中でも、今日までこれほどしっかりと受け継がれてきたものはないに違いない。子どもたちは幼いころから学校で武器の扱い方を学ぶことになっており、十代に達するまでに、まずはショットガンの、続いてピストルの扱い方を教え込まれる。こうして、銃は人々の人格のバックボーンとなるばかりか、男女を問わず（クライナには女性闘志も数多い）銃さばきのよしあしで個人の評価が定まることにもなる⁽²²⁾」と旧ユーゴスラヴィアの内戦取材したジャーナリスト、M・グレニーは書いている。このクライナ地方とは、まさにオス

マン・トルコに対する「軍事国境」に指定された地域であり、ここに居住するセルビア人も国境守備隊として入植してきた人々の末裔からなるものである。

もともと旧ユーゴスラヴィアの内戦では、セルビア人の残虐行為が喧伝されたにもかかわらず、必ずしも彼らのみが残虐行為を働いたわけではない。それどころか似たような行為はボスニア側でもクロアチア側でも繰りかえされることとなったが、その背景には同じような社会状況が介在していた。じじつ両帝国の勢力バランスが変化し、時代と共にオスマン帝国との国境が南に移動してゆくのに応じて、「軍事国境」も南に移動し、そこにセルビア人、クロアチア人、マジャール人、ワラキア（ルーマニア）人が国境守備隊として配置されたとき、⁽²³⁾尚武の気風や掠奪―彼らは見境なく掠奪した―は、風土病さながら蔓延してゆくこととなる。その一方で上述したように、オスマン支配下でもザドルガが再生されたとき、バルカン地方一帯に独特の社会状況が形成されてくることとなったのである。

注

- (17) Tom Nairn, *Faces of Nationalism: The Yarnus Revised*, London and New York, 1997, pp. 105–106.
- (18) *Ibid.*, p. 107.
- (19) *Ibid.*, p. 110.
- (20) エドガー・ヘッシェ、佐久間 穆訳『バルカン半島』みすず書房、一九九五年、一五一ページ。
- (21) ミヒャエル・ミッテラウアー、若尾祐司他訳『歴史人類学の家族研究——ヨーロッパ比較家族史の課題と方法——』新曜社、一九九四年、一二七ページ。なおザドルガに関しては、越村 勲編訳『バルカンの大家族ザドルガ』（『叢書東欧』6）彩流社、一九九四年所収の、ウェイン・ヴチニッチの論文「東ヘルツェゴヴィナ、ビレチャ・ルディネ地方のザドルガ」も参照。ヴチニッチもまたオスマン支配下における抑圧の結果、キリスト教徒が孤立化したことにザドルガの結成・再生の契機を見出しているが、貢租徴収業務を円滑に行うために、オスマン支配下、ハプスブルク支配下のいずれにおいてもザドルガを結

成させようとする働きかけが権力の側からあったという。

(22) ミーシャ・グレニー、井上 健他訳『ユーゴスラヴィアの崩壊』白水社、一九九四年、二四ページ。

(23) John A. Armstrong, *Nations before Nationalism*, The University of North Carolina Press, 1982, pp. 83-84.

四

以上のような経過を辿って台頭してきたナショナリズム、エスノ・ナショナリズムはいかなる経過をたどるのか。「その崩壊を決定的に印象づけたのは、クロアチア人の間に、次いでセルビア人の間にも広がった意識の画一化である。……クロアチア人もセルビア人も、それぞれ相手がいかにおぞましい化け物であるかを私に延々と説きつけようとする。その論拠として歴史を挙げ、宗教を挙げ、教育、生物学を挙げはするが、本質的に自分たちが善であり、相手が悪なのだということを私に納得させた人物は一人もいなかった⁽²⁴⁾」とグレニーは書いている。こうした意識の画一化とは、相手の集団を構成する個々人から具体的な顔を消し去ることによって、個々人を集団に還元しようとするものである。それと同時に集団を悪しざまに描き出すことによって、そこには集団的な敵愾心をかきたて、相手に対してためらいなく暴力を振るうことを可能にする契機が秘められていた。換言すれば常日頃つきあっていた隣人たちに対してさえ、身の毛もよだつような暴力を振るうこととなるのも、当の隣人の個性、さらには彼との具体的ななかかわりが、「画一化されたイメージ」のなかで解消されてしまったがためである。それと同時に悪魔さながらに描かれた相手とは対極に位置するものとして自分たちを描きだすことも、同じく自分自身の個性を消し去って、自己が帰属する民族集団へと溶け込ませてゆく過程を意味しているであろう。

こうした画一化のプロセスは、集団相互間に渦巻く激しい敵意と裏腹の関係をなすものである。そしてそれは集団相互間の身体的、文化的特徴に著しい相違が見られるときに生じてくる一方、⁽²⁵⁾しかし他面、現実の生活レベルでさしたって違いが認められない場合、かえってそこにも反目を掻きたててゆく契機が秘められていた。フリッツ・スターンがドイツにおける反ユダヤ感情の台頭を検討し、ユダヤ人がゲットーに閉じこめられ、ドイツ人とユダヤ人とが別々の世界を形成していたときよりも、むしろユダヤ人がドイツ社会に同化し、目覚ましい成功をおさめたときにこそ生じてきたと断ずるとき、類似性に潜む反目的契機が強調されている。換言すれば反ユダヤ人感情とは、以前にはバーリアとして、社会の周辺部に押しやられていたユダヤ人が、一躍社会の中枢部へと踊り出たことに対する反感に根差したものであり、外面からは見分けがつかなくなったところで、両者の違いを意図的に鮮明化せんとしたところに発するものである。じじつユダヤ人は「ずるかしく、抜け目なく、しかも「魂なく」学んでいる」といった批判が投げかけられることとなったのも、ユダヤ人が高等教育の分野に大挙して流れこんできたがためである。またユダヤ人が一種の秘密支配を樹立せんとしているという流言が、まことしやかに流されたのも、経済界、金融分野、ジャーナリズムの世界でユダヤ人が目覚ましい活躍をしているのを目の当たりにしたためであったといえよう。⁽²⁶⁾

そこには「距離が近くなればなるほど、境界を保つために差異化の力がより強く作用する」という、⁽²⁷⁾集団相互間に働くダイナミズムが、端的に表現されている。それと同様、同じような現象は、昨今のナシヨナリズム、エスノ・ナシヨナリズムにも、数多く見出すことができるであろう。じじつ旧ユーゴスラヴィアの内戦は血で血を洗う凄惨なものであったが、その少なからぬ部分は、互いによく似たもの同士で戦わされたものである。例えばセルビア人とクロアチア人の場合、ほぼ同じ南スラヴ語を話し、何世紀にもわたって同じような村落生活を営んできたものである。またかたやギリシア正教、かたやカソリックと、異なる宗教を信じていたものの、都市化が進行し、先行する共産主義体制のもと

で世俗化が強行されたこんにちでは、宗教上の違いもかつてほどの意味を持ちはしなかった。じじつこれら両民族間の通婚は、あるところでは三〇パーセントにも達している。⁽²⁸⁾にもかかわらず両者が、町や村、さらには街路をはさんで死にものぐるいの戦いを繰り広げることとなったのも、その一因はこれら両者が相似たものであったことに求めることができるであろう。

「集団間の違いが攻撃的に表現されなくてはならないのは、まさにそれが小さいからにほかならない。二つの集団の違いが大したものではないけれど、両者ともその違いを絶対的なものとして描き出そうとします懸命になる。その上、集団を一つにまとめるために必要とされる攻撃性は他の集団めがけて外へ向けられるだけでなく、個と集団のけじめになるような違いを排除しようと内へも向けられる。個人は集団に帰属するために精神的な代償を支払う、とフロイトは言っている。順応したいという攻撃的な欲望の矛先を自らの個性に向けなければならぬのだ。たとえば、あの歩兵はセルビア人社会に溶け込むために、自身の個性のみならず、クロアチア人の元友人たちとの共通の絆の記憶も抑圧しなくてはならない。……民族主義者は『小さな違い』——本来は問題にならないもの——を取り上げて、大きな違いに仕立て上げるのである。この目的のために、伝統が捏造され、大衆消費用に過去が輝かしく粉飾され、磨き直されて、そもそも自分たちを一つの民族と考えたこともなかったような民族が突如として自らを一つの国家として夢想するようになる」、と旧ユーゴスラヴィアの内戦に関してすぐれたルポルターージュをしたためたM・イグナティエフは書いている。

イグナティエフによれば、それはわずかな差異にこだわる「微差のナルシズム」(フロイト)と言うべきものである。もっともイグナティエフが現実を目撃したのは、幼なじみのクロアチア人とセルビア人とが、兵士として銃を構えて向き合う一方で、ハンド・トーカーで冗談を言い合う姿であり、自分自身のかつての想い出と敵に対する「画的イ

メージ」とのギャップに戸惑い、当惑する姿である。しかしそうした狐疑逡巡を払拭するのは、向こうの塹壕に潜む「敵」にとって、自分はその一セルビア人（あるいはクロアチア人）として映ずるに違いないという意識である。そうである以上、自分じしんもまた一切の個人的な想い出を断ち切って、自らが帰属する民族の一員となりきり、相手をもそのように取り扱う以外に、生き残るすべはないであろう。⁽³⁰⁾

もっともこうした「画一的なイメージ」が、広く共有されるためには、多くのところで過去の歴史が介在していたことは事実である。例えば第一次大戦後に誕生した新生ユーゴスラヴィア国家にとってセルビア人とクロアチア人との角逐は、宿命的な意味合いを帯びていた。というのも多くのクロアチア人にとって、ユーゴスラヴィア国家とは、その実、大セルビア国家の別の表現にほかならなかったからである。したがってクロアチア人にとって可能な限り自治を確保することこそが、民族的使命でなければならず、そのために合法、非合法の手段を駆使することは、自らに課せられた聖なる義務である。⁽³¹⁾

しかもこうした角逐は、第二次大戦が勃発し、ドイツ軍がこの地に侵攻してくるや、クロアチアにいち早く対独協力政権が樹立されたことに如実に現れている。またクロアチアのファシスト団体「ウスタシャ」が、「正教徒の村々を焼き払い、信者の首を刎ねる〔等〕……枢軸軍でさえ仰天するほど血腥い蛮行」⁽³²⁾を繰り返したことも、後世に暗い影を投げかけている。それと同時に、対独レジスタンスもドイツ占領軍に対するユーゴスラヴィア人民の一致結束した英雄的決起といったものは、ほど遠い様相を呈していた。じじつこの地でチトーのパルティザンとならんで勢力を振るったのは、旧ユーゴスラヴィア軍の残党のセルビア人からなる軍事組織「チェトニク」である。そしてこのチェトニクは、ドイツ軍とウスタシャとを相手として、暴虐には暴虐をもって戦う一方、次第にチトーのパルティザンに標的を絞られ、ドイツ軍よりもチトー相手に熾烈な戦いを繰り返すこととなったのである。⁽³³⁾

いずれにせよこんにちにおける旧ユーゴスラヴィアの内戦には、以上のような過去が投影されている。はたして共産主義政権が崩壊して間もなく、クロアチアが独立を宣言した際、クロアチアのクライナ地方に住むセルビア人が反発したのも——たんに尚武の気風に満ちあふれていただけでなく——この地のセルビア人が、ウスタシャによるジェノサイドの生き残りの子孫であったがためである。その一方でクロアチア側は、セルビア・ナショナリズムの沸騰に、大セルビア主義の復興を嗅ぎつけ、セルビア人民兵にかつてのチェトニクの再来を見て取った。この意味で「ウスタシャ」、「チェトニク」は、現実に認められるわずかな差異をシンボライズする格好の標語であったが、それがかくも多くの人々の心に不安と怒り、さらには誇りをかき立てたのは、以上のような歴史的経緯があったからこそである。しかもこうした非難合戦が、忌まわしい過去の亡霊を掘り起こしつつ執拗に繰り返えされるとき、人々の心に微妙な変化が生じてくるであろう。

「おまえはファシストだ、と敵に言われつづければ、人はやがて、ファシストだとみずから名乗るようになる。敵の侮辱を矜持に変えて勲章にしてしまう。この先何週間かのあいだに、わたしは検問所で同じ言葉を何度も聞くことになる。クロアチア人であれば、『やつらはおれたちをウスタシャと呼ぶ。結構、そのとおりさ』と言い、セルビア人なら、『みんなおれたちをチェトニクと呼ぶ。ああ、そのとおり』とやはりうそぶく。悪影響をおよぼし合って、自分で自分を貶めていくのである」⁽³⁵⁾と、イグナティエフは書いている。彼によれば、そうした感情が生じてくるのは、チトー体制下で忌まわしい過去の記憶が封印されていたにもかかわらず、依然として心のなかで、苦々しい記憶として生き続けてきたがためである。同様にグレニーもまた「四十年の間人々のゆがんだ潜在意識の中に埋もれていた、ウスタシャとパルチザンとチェトニクが繰り返した戦争の記憶が目覚ました。一九九一年の戦争は、憎悪という病が孫子の時代にまで受け継がれていくものだとということを証明してみせた」⁽³⁶⁾と書いている。

その一方で、戦いを凄惨なものに仕立て上げてゆく上で、戦闘組織や戦闘形態そのものが大きな影響を及ぼしている。「現在、旧ユーゴの多くの地域が、中世後期以来、欧州では絶えて見られなかったある種の人間に支配されてしまっている。——軍司令官。……彼らが得意になって乗りまわすのは、四輪駆動のチェロキー・チーフ。屋上に警察の青いランプを点滅させ、検問所を勢いよく走り抜ける」³⁷とイグナティエフは書いている。こうした軍司令官は、その配下に専属の民兵組織を従えており、そして軍司令官、さらに彼に付き従う民兵たちも、往々にして犯罪者ないし素性の卑しい連中からなっていた。この意味でこうした運動が過去の栄光を褒め称え、固有の民族文化的伝統を保持せんと主張していたにもかかわらず、その運動の実態は彼らじしんの主張とかけ離れたものである。そしてこうした連中が闘争の主役を演じることとなったのも、敵と味方が町と町、村と村、街と街をはさんで相對峙するという極限状況を呈していたことに求めることができるであろう。じっさいのところ昨日まで隣人、友人であった連中が、いつなんどき殺人鬼へと変身するかもしれず、したがって「殺れる前に殺れ」といった格率がまかり通るようなところでは、「軍司令官」こそが悪魔的な守護神ながらである。

それと同時に彼らは、それまで平和裡に共存してきた集団相互間に意図的に亀裂を生み出し、彼らの間に不和反目を醸成する上で、無視し得ぬ役割を演じていた。それはウワサを撒き散らすことによって恐怖心や敵愾心を煽りたて、さらに相手方に対する怒りをかき立てるために、自分たち手での仲間を殺害するという、おきまりのマキアヴェリ的手段を介してである。こうした操作に翻弄され、さらにすぐ近くで起こった残虐行為の数々を耳にするにつれ、一般住民も「自らを護るために」武器をもって立ち上がり、容赦なく「敵」に襲いかかることとなった。

「土地のセルビア人は、総じて民族浄化に進んで手を貸そうとはしなかった。土地の人々を反ムスリム・キャンペーンに巻き込むために、様々な手段が浄化作戦の指揮官によって編み出された。それらは通常、もしもセルビア人が機先

を制しなければ、ムスリムが民族浄化を始めるだろうと言って恐怖を煽りたてることであった。恐怖と不信の種をまくために巧妙な方法が用いられた。エジョーブ・シュティコヴァックは、ムスリムに対する民族浄化に関する素晴らしい報告で、セルビア人を反ムスリムへと転換させるために、あるムスリム農夫の妻の殺害についての物語が、ビヴァッチ周辺地域でいかに遠方にまで広範にばらまかれたか述べている。この戦術は、実際にはおそらくセルビア人過激派によって婦人が殺害されたにもかかわらず功を奏した。民族浄化の扇動者は——常にというわけではないが——通常は、浄化の対象となった町や都市の外部の人間であった。これらの部外者には民兵や不正規兵が含まれており、その内いくばくかはセルビアからやって来た『週末だけの戦士』であった。こうした残虐行為に対して、外部のコントロール下にある土地の犯罪分子、民族的過激派、民兵がどれだけ責任を負っているかを確定することはきわめて困難で、戦争中にセルビア人によってなされた残虐行為に関するさらなる証拠収集が待たれるところである。ひとたび民族浄化が始まるや、土地のセルビア人たちは、以前のムスリムの隣人たちに対して結束して守りを固めたように思われる。隣接するムスリム支配地域からセルビア人避難民が流入してくるにつれて彼らの決意は固まり、ムスリムが戻ってくればなすであらう復讐の恐怖によっても固まった⁽³⁸⁾と、ボスニアにおける民族紛争に関する研究で、ある政治学者は書いている。

もともと民族浄化の下手人はセルビア人に限られるものでなく——その程度に差があるものの——クロアチア人やムスリムも、責めを負うべきであることは、既に指摘したとおりである。しかしここで分析されたところの民族浄化にいたるプロセスは的確なものであり、そしてその結果はおぞましい残虐行為へと帰着した。それは殺人、暴行、陵辱、さらには強制収容所への連行とそこでの非人間的な取り扱い、大量殺戮と、おきまりのコースを辿るものにほかならない。またそうした過程で、「民族抗争では、相手を痛めつけたい、卑しめたい、罰したいという欲望のみが前面に出⁽³⁹⁾」といった指摘に示されるように、「敵」の住居から家財道具を根こそぎ持ち去り、家屋を完膚なきまでに破壊するといっ

たことも繰りかえされることとなったのである。

ところでこうした暴力行為は人々にいかなる影響を与えたのか。もとより国家権力を後盾として二〇世紀に戦わされた幾多の戦争は、エスノ・ナシヨナリズムを巡る争いよりも多くの犠牲者を出してきたことは事実である。しかし人々に与える恐怖、人々の心に刻み込む傷の深さの点で、こうした争いは国家間の戦争に勝るとも劣らぬものがあったといえよう。というのも民族間の争いが昂じてゆき、町と町、村と村、さらに隣人と隣人とが街路をはさんで向き合い、相争うとき、人々に降りかかる運命には戦時下の住民と比較して、はるかに苛酷なものがあったからである。

それはまさしく真性のホッブズの状況と目されるべきものである。現代イギリスの国際政治学者ヘドリー・ブルは、真性のホッブズの自然状態に置かれた人々と戦争状態にある国家の成員とを比較して、より悲惨で緊張した状況を前者に見出していた。ブルによれば隣人同士が相対峙しているとき、たったの一撃で命を落とすことになるゆえに、絶えず神経を張りつめていることが必要とされている。それに対して国家が一撃で倒れることはほとんどありえないゆえに、個々の成員には息をつく余裕が生じてくるであろう。⁽⁴⁰⁾ この意味で自然状態をば「孤独で貧しく、きたならしく、残忍で、しかも短い」と捉えたホッブズの診断は、まさに民族浄化の業火に苦しむ人々の生活を的確に表現するものである。

そればかりでなく日頃から顔をつきあわせている人間相互間に勃発した暴力は、国家間の戦争と比較して、はるかに深い傷跡を心に残すことになるであろう。というのもそこでの暴力は戦場という限られた場ではなく、日常の世界そのもので生起し、普通の市民が普通の市民によってむごたらしい仕方では殺害されることとなるからである。もっとも幼なじみであるにもかかわらず、暴力行為に及ぶ例が跡を絶たない一方で、命の危険を冒してまでも隣人同士が互いに助け合った例も多数報告されている。しかしたとえ顔見知りでなくとも、隣人と同じ民族集団に属する者によって家財道具

を打ち壊され、家屋に放火され、ましてや家族を傷つけられた人々にとって、その隣人を眺める眼差しは、もはや昔と同じでありえない。

それに加えて国家間の戦いの場合、戦争と暴力を正当化するために歴史家が一致結束して論陣をはるのに対して、民族間の争いを正当化するにあたって足並みがそろうことは稀である。またナショナリズム運動そのものに注目しても、かつてのナショナリズムとこんにちのエスノ・ナショナリズムとの間にも、微妙な、しかし質的な差異を認めることができるであろう。換言すればかつてのナショナリズムがその成員に未来に対する使命感を鼓舞せんとしていたのに対して、こんにちのエスノ・ナショナリズムは、他からの脅威に対して自分たちの共同体を防衛することにこそ、そのエネルギーを費やすものである。またかつてのナショナリズムが新生国家の青写真を高らかに掲げる指導者によって率いられていたのに対して、こんにちのエスノ・ナショナリズムは少なからぬ場合、「軍司令官」や犯罪分子に牛耳られたものである。しかもそこでは暴力が、一切の理念を欠いた剥き出しの暴力として立ち現れてくるゆえに、それと折り合いをつけることはきわめて困難であったのである。

「互いに顔をつきあわせている地域の共同体は、国家や国民と比べて、より持続的かつ不安定なたちで、こうした類いの不愉快な記憶を抱いたまま生き続けなければならない。それは、一つには、暴力の規模がもたらしたものであったが、いま一つには、国民や国家は、『国民的』利益や『国民的』な優先順位を雄弁かつ巧みに主張することによって、その背後に身を隠すことができたためである。それに対して、これらの地域的な共同体、さらには公定の歴史を持たないこれらの共同体の『歴史』は、どのようにして暴力についての苦悩に満ちた出来事と折り合いをつけるのか？」⁽⁴²⁾とG・パンデは書いている。パンデがこのように述べたのは、印パの分離独立に際して激しく戦わされたヒンドゥーとムスリムとのコミュニケーション紛争に関するものである。しかしここで下された診断は、そのまま旧ユーゴスラヴィアの内戦に妥

当するであろう。

注

- (24) グレニー、前掲者、一二八ページ（但し傍点は木村）。
- (25) そのなによりの実例は、太平洋戦争に際して、日米両国間で繰り広げられて宣伝合戦に見て取ることができる。ジョン・W・ダワー、猿谷 要監修・斉藤元一訳『容赦なき戦争——太平洋戦争における人種差別——』平凡社（平凡社ライブラリー 419）二〇〇一年、を参照。
- (26) フリッツ・スターン、檜山雅人訳『夢と幻惑——ドイツ史とナチズムのドラマ——』未来社、一九九六年、一五〇—一六二ページ。
- (27) 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会、二〇〇二年、二一ページ。小坂井氏もまたユダヤ人が集団虐殺の犠牲となった原因をユダヤ人がドイツ社会に同化したことに見出し、「ユダヤ人が非ユダヤ化すればするほど、彼らはより恐怖の的になった。彼らの出身がばれないようになればなるほど、反ユダヤ主義の世論が彼らに投げかける呪いは激しさを増した」（二〇ページ）とする、あるフランス人の診断を紹介している。
- (28) マイケル・イグナティエフ、真野明裕訳『仁義なき戦場——民族紛争と現代人の倫理——』毎日新聞社、一九九九年、四八ページ。
- (29) 同、六七—六八ページ。
- (30) 同、四八—五三ページ。
- (31) Hugh Seton-Watson, *Eastern Europe between the Wars 1918-1941*, 3rd and revised ed., Harper & Row, 1962, pp. 216-241. 例えはユーゴスラヴィア建国後、ただちに国制の基本を連邦主義か、それとも中央集権主義に置くかが争われたが、この問題は主としてクロアチアの取り扱いをめぐるものである。そしてこの論争が中央集権主義の方向で決着をみた後、クロアチアの反中央意識が激化してゆき、一九二八年にクロアチアのリーダー、ステエパン・ラディッチが暗殺された後に訪れた政治危機を收拾するために、国王独裁体制がしかれることとなったが、ここでもクロアチアが問題の核心をなしていた。というのもクロアチアの世論を鎮めるためとして、ラディッチの後継者マチュックが出した条件は、クロアチアを含む七つ（後に五つ）の構成

単位に独自の軍隊を始めとした大幅な自治を付与することを求めるものであり、とうていベオグラードが承認し得なかったものであったからである。この国王独裁は一九二八年から一九三四の国王暗殺まで続くこととなるが、その間、クロアチアにはセルビア人の行政官、警察官が多数派遣され、彼らによってクロアチア住民に対する拷問を含む苛酷な支配がなされることになったのである。

- (32) スティーヴン・クリソルド編、田中一生訳『ユーゴスラヴィア史…増補版』恒文社、一九九五年、二二九ページ。
- (33) 同、二三〇―二四〇ページ。
- (34) Laura Silber and Allan Little, *Yugoslavia: Death of a Nation*, Penguin Books, 1995, p. 93.
- (35) マイケル・イグナティエフ、幸田敦子訳『民族はなぜ殺し合うのか——新ナショナリズム6つの旅——』河出書房新社、一九九六年、五〇ページ。
- (36) グレニー、前掲書、一七七一―一七八ページ。
- (37) イグナティエフ『民族はなぜ殺し合うのか』五八ページ。
- (38) Steven L. Burg & Paul S. Shoup, *The War in Bosnia-Herzegovina: Ethnic Conflict and International Intervention*, New York and London, 2000, p. 174.
- (39) イグナティエフ『民族はなぜ殺し合うのか』六三ページ。
- (40) ヘドリー・ブル、臼杵英一訳『国際社会論——アナーキカル・ソサイエティ——』岩波書店、二〇〇〇年、五八―五九ページ。
- (41) ホップズ、永井道雄訳『レヴァイアサン』（『世界の名著』23）中央公論社、一九七一年、一五七ページ。
- (42) Gyandendra Pandey, *Remembering Partition*, Cambridge University Press, 2001, p. 177.

五

以上に見てきたよう旧ユーゴスラヴィアの内戦は、きわめて凄惨なものである。それはその犠牲者の数とそこで繰り

広げられた残虐行為の数々で、冷戦終結直後の楽観的な未来像に冷水をぶっかけるものであったが、しかし似たような状況はアフリカやアジアのあちこちで、冷戦終結以前から繰り返り広げられており、こんにちにおいてその勢いが増すことがあれ、終結の兆しを見せ始めているわけではない。じじつルワンダにおけるツチ族とフツ族との抗争とそこで繰り返り広げられたジェノサイド、スーダンやエチオピア、ソマリアにおける抗争、イラクやトルコにおけるクルド族、旧ソ連におけるチェチェンを始めとする諸民族の抗争、インドにおけるヒンドゥーとムスリム、スリランカにおけるタミルとシンハラ抗争、ビルマにおけるビルマ人と山岳民族、インドネシアにおけるムスリムとキリスト教徒、フィリピンにおけるムスリム等、数え上げていけばきりが無い。しかも現代世界を規定する基本的な趨勢には、民族問題を生みだしてゆく契機が秘められていた。

この点で、ジャンマリ・デーノの考察は示唆的であろう。デーノによれば、経済グローバル化が進展してゆくにつれ、国家はもはやかつての凝集性と一体性を喪失し、国境を越えて広がる無数のネットワークからなる社会にとって代わられることとなる。そしてこうした状況下にあつて民族的な絆は、アイデンティティの抛り所として、従来にもまして人々の忠誠心を引きつけるようになってきた。というのもネットワーク社会とは、一見したところルーズな様相を呈してはいるものの、他面では高度産業社会の要請に応えるために、厳格な品質管理しながら、人々に厳しい資格を要求する社会であつたからである。換言すればそこで必要とされる厳格な自己管理に倦み疲れた人々にとって、民族なるものは確かな安らぎを提供するオアシスさながらにはかならない。それに加えて広大無辺なネットワーク社会で自己のアイデンティティに不安を抱く人々にとって、民族のもつ魅力には抗しがたいものがあるであろう。

「共同体の単純なわかりやすさも手伝って、その優しいぬくもりに人々が惹かれてゆくのはむしろ自然なことではないだろうか。国家という概念がますます遠く、抽象的であると感じている人々、企業による統一化についていけない

人々、そして企業に受け入れられずに孤立させられた人々。これらの人々にとって共同体は、各自がアイデンティティを見いだすことのできる自然な枠組のように見えるのではないだろうか。特定の土地とのつながりを持たない遊牧民のような生活を送る一方、ひとつの職種に閉じ込められて全体を見渡すことができない現代人。これでは仕事に意味を見いだせないうえ、自分がいくらでも再生可能な社会のパーツであるかのように感じられてしまう。同時に常に孤独な現代人は、自分のルーツをたどっていけば、結局は自分と他者をへだてる違いと差、出身地と共同体にたどりついてしまう⁽⁴³⁾」とゲーノは書いている。

それと同様、アンソニー・スミスもまた、グローバル・カルチャーの根無し草的性格を強調しつつ、そこにエスノ・ナショナリズム台頭の背景を見出していた。スミスによれば、このグローバル・カルチャーなるものは、かつてのいかなる帝国にもまして世界に拡大しているものである。またそれは、すぐれて人工的であり、文化のいかにかわりなく受容可能であるゆえに、普遍的なものであり、総じて技術的に秀でたテクノクラートに依存するものである。しかしながらこのグローバル・カルチャーは、無機的で根無し草的性格を帯びているゆえに、人々にいかなる帰属意識も与えることがなかったのである⁽⁴⁴⁾。

換言すれば昨今に台頭してきたエスノ・ナショナリズムのうち、その少なからぬ部分は、こうしたグローバル・カルチャーに対する反動として生じてきたものにほかならない。同様にイグナティエフもまた「グローバルイズムは我々のアイデンティティの表層で特殊性を洗い流し、表層の洗い流しを免れる内面的な違い——言語、メンタリティ、神話、そして幻想——の、ますます独断的な擁護へと我々を押し戻す。グローバルイズムが我々をより緊密に結びつけ、皆を隣人同士にさせ、民族のあるいは地域的な消費スタイルによって区分けされたアイデンティティの古い境界を消滅させるにつれて、反動として人は残されるぎりぎりの違いにしがみつ⁽⁴⁵⁾く」と書いている。

しかもこうした考察は、ナショナリズムの歴史に照らすとき、すぐれて説得的であろう。アイゼア・バーリンによれば、そもそもナショナリズムとは、近代世界の普遍主義的趨勢に対する反動として登場してきたものである。それは啓蒙主義に対するヘルダーの反逆に起源するものであり、その後の様々な非西欧地域のナショナリズムの公分母をなすものであったが、しかし二〇世紀の後半に産業化が飛躍的に進展し、社会工学的知識が支配的となるにつれて、いまだ、強力な力を兼ね備えて姿を現してきた。それは「特殊に人間的なものとしての人間、つまり個々に自らの意志、感情、信念、理想、生き方をもったものとしての人間という感覚に根差した人権が、『地球大』の計算と大規模な未来予測のなかで見失われてしまったという感情」⁽⁴⁶⁾に由来するものである。つまりそれは日々勢いを強めてゆく無機的、人工的な世界が、自分たちの慣れ親しんだ生活世界を蝕んでゆくといった感情に発するものであったといえよう。

もっともバーリンは、こうした希求の背後に、過去に対するノスタルジアを見出している。それは自給自足的な村落で、共同体的感情につつまれて有徳で自由な生活を送っていた過去の黄金時代に対する追憶に由来するものである。この意味でバーリンが念頭に置くナショナリズムにはロマンティズムが脈打っていたが、しかしこんにちのエスノ・ナショナリズムには、こうしたロマンティズムよりも、民族の生存という、より直截な目的が中心的な課題をなしていた。

それは、一つには無機的で人工的な文化の氾濫が、およそ文化に対する繊細な関心そのものを萎えさせてゆくからにほかならない。この意味で「軍司令官」が指導的な役割を演じていることには、現代という時代の趨勢が端的に表現されている。それに加えて民族の一員となるためには、いかなる努力も必要とされず、ただ民族の一員として生まれ落ちるだけで充分であるという事情が介在してもいた。例えば教養人とみなされるためには、読書が必要である。またサッカー・ファンであるためには教養人ほどの努力が必要でないものの、試合を観戦することは必要条件となっている。そ

れに対してセルビア人、クロアチア人、あるいは日本人であるためにはいかなる努力も必要としなかった以上、それは人々に確かなアイデンティティを与えるものであったのである。

「これらの集団の成員となるためには、業績ではなくてただ帰属するだけで充分であるという事実こそが、他のなにも増して当該集団を自己の品質証明の中心へと仕立てあげる。品質証明が業績に基いていないとき、それは脅威にさらされることがより少なく、安定している。たしかに業績は人々が自己自身のアイデンティティを感じとる上で役割を果たしているものの、もっとも基本的なところでわれわれのアイデンティティは、業績よりも帰属に依存しているように思われる」⁽⁴⁷⁾、とJ・ラズとM・マルガリットは書いている。

この意味で共産主義が解体したとき、多くの所でナシヨナリズムが共産主義に代わる正当化原理として登場してきたのも、その原因は、ナシヨナリストであるためには——指導者も民衆も——なんらの努力も必要とされないがためである。同様にグローバル化が進展しつつあるこんにち、この人工的で無機質なグローバル文化が、文化に対する繊細な関心を萎えさせてゆくとしたならば、そこにもナシヨナリズム、エスノ・ナシヨナリズムを尖鋭化させてゆく契機が秘められているであろう。というのも文化に対する繊細な関心は、個々人のアイデンティティをも育むものであり、したがってたとえそうした関心が民族文化の称揚につながる場合でも、なおそこに民族なるものに解消されない個人的領域を確保する場が存在していたからである。

そればかりでなくグローバルリズムには、より直接的にエスノ・ナシヨナリズムを掻き立ててゆく契機が秘められている。というのも民族構成が多様なところでグローバル・エコノミーが威力を発揮するとき、企業家精神に富んだ少数民族が機会を巧みに捉えて巨万の富を蓄えることとなり、貧富の対立が民族的な対立とオーヴァー・ラップして立ち現れてくるからである。周知のようにこうした現象は、東南アジアの華僑に見出されるものであり、東南アジア各地で頻発

する反華僑暴動の背景をなすものである。例えばインドネシアで中国人は全人口の三パーセントでしかないのに対して、小売業と卸売り業の大半を掌中におさめ、経済全体に占める彼らの勢力は七〇パーセントにも達している。しかもスカルノ大統領の経済自由化政策によって彼らがより一層豊になったと受け止められた結果、東南アジアの経済危機でスハルト大統領が退陣に追い込まれた際、彼らは深刻な危機に直面することとなったのである。じじつ一九九八年五月にはジャカルタで反中国人暴動が発生し、放火、強姦、殺人——そのうちの幾人かは生きながら炎の中に放り込まれた——等、乱暴狼藉の数々が繰り返され、死者の数は二千人にも及んでいる。⁽⁴⁸⁾

他方、経済自由化以降のロシアにおいて、巨万の富を築いた一握りの億万長者のうち、その少なからぬ部分はユダヤ人である。またクロアチアとセルビアとの紛争のいま一つの原因は、クロアチア人が経済的に恵まれていた一方で、セルビア人が総じて貧しかったことにもあると指摘されている。⁽⁴⁹⁾ しかもこうしたところに生じてくる怨嗟が選挙に際して政治家によって利用され、増幅されるとき、対立はより尖鋭化してゆくこととなるであろう。

「自由な市場民主主義のグローバルな拡大は、かくして非西欧世界全体を通じて民族的な不安定と暴力とを悪化させてゆく主たる原因であった。マンダレーからモスコ、ジャカルタからナイロビにかけて、西欧世界の外では一国また一国と、レッセ・フェール市場が『外来の』少数者の驚くべき富と経済的卓越性とを増大させ、貧しくなった『土着の』多数者の民族的な嫉妬と怨恨をますます蓄積させていった。……残念なことに民主主義はこの怨恨を鎮めはしなかった。それどころか民主化は『土着の』多数者の政治的な声と力とを増大させることによって、ザンビアのムカベ、セルビアのミロセヴィッチ、ロシアのジュガーノフ、ボリビアのグレート・コンドル、ルワンダのフツ族の指導者といったデマゴグの台頭を促したが、彼らは嫌われものの少数者に対する大衆の憎しみを巧みに煽りたて、国の富は『国民の真の所有者』に返還されるべきであると主張した⁽⁵⁰⁾」と自分自身フィリピンの華僑出身であったある著者は書

いている。もっともグローバル化によって、一般大衆の生活水準がいくばくか向上したことは否めない。しかし一握りの富者の富の増加はそれと比較にならぬほどである。しかも彼らの大部分が民族的少数派に属しているとき、経済グローバル化は、世界のいたる所で民族紛争の地雷原を作り出してゆくこととなったのである。

注

- (43) ジャンマリ・ゲーノ、舩添要一訳『民主主義の終り』講談社、一九九四年、八五ページ。
- (44) Anthony D. Smith, *Nations and Nationalism in a Global Era*, Cambridge, 1995, pp. 21-24.
- (45) イグナティエフ『仁義なき戦場』七五―七六ページ。
- (46) アイゼア・バーリン「曲げられた小枝」、バーリン、福田歓一他訳『理想の追求——バーリン選集4』岩波書店、一九九二年、三二―三三ページ。
- (47) Avishai Margalit and Joseph Raz, 'National Self-Determination', in *Journal of Philosophy* vol. 87, No. 9, 1990, p. 447.
- (48) Amy Chua, *World on Fire: How Exporting Free Market Democracy Breeds Ethnic Hatred and Global Instability*, Doubleday, 2003, pp. 43-45.
- (49) *Ibid.*, pp. 171-175.
- (50) *Ibid.*, p. 187.

六

以上のように経済グローバル化には、ナショナリズム、エスノ・ナショナリズムを掻きたててゆく契機が秘められている。それと同時にグローバリズムが国家を蚕食してゆくこととなるとするならば、なすべきことはこんにちの状況に

適合的な国家を再構成することであろう。というのも世界を概観するとき、単一民族で構成される同質的な国民国家は、日本など、ごく少数の国々に限られていたからである。しかもここで展開されるナショナリズム、エスノ・ナショナリズムが自分たちの国家を持ちたいという願望は別として、新生国家に対する明確な青写真を有していないとするならば、ことはより深刻であろう。

「エスニシティや言語による呼びかけは、これらの基準の上に新しい国家が形成されるときでさえ、何ら未来に対する指針を提供するものでない。それは単に現状に対する抵抗にすぎず、もっと正確に言えば、エスニックなものと定義される集団を脅かす『すべての他者』⁽¹⁾に対する抵抗である」とホブズボウムが書くとき、そこで強調されているのはエスノ・ナショナリズムの政治的不毛性、これである。しかも自らの文化的独自性を守ろうとするこうした運動は——たとえその主張が真性なものであるとしても——それが性急に追求されるとき、その主張とは裏腹に、文化的な不毛性へと帰着してゆくこととなるであろう。というのも自らの文化に対する盲目的な忠誠のあげくに、他文化に対して心を閉ざすとき、異文化間の交流はおろか、より大きな文化世界から孤立してゆくこととなるからである。

「ブルターニュ人やフランス領ナヴァルのバスク人にとって、高度に文明化され洗練された観念や感情の流れに引き入れられ——フランス国民の一員となつてフランス市民権が付与する諸特権に平等に参画し、フランスが与える保護の恩恵に浴し、フランスの力の威厳と威信とを平等に享受する——ことの方が、故郷の岩山と過去のなかば野蛮な叙事詩の上にふくれ面をして胡座をかき、世界の普遍的な動きに参画することもなければ興味を持つこともなく、自分たちの狭隘な精神的軌道の中で動いているよりも、より有利であるとは限らないと、何人も考えることはできない。同様の指摘は、イギリス国民としてのウェールズ人ならびにスコットランド高地人にもあてはまる⁽²⁾」と、ジョン・ステュアート・ミルは書いている。

そうであるとするならば採るべきは、自らの文化的価値をいたずらに強調することではなくて、多民族的な状況を踏まえて国家を構想することであろう。第一に、多数派民族に依拠して単一の国民文化を性急に建設することは、少数派からの反発を招き、かえって国家の解体へと至りつく危険があること、これである。第二に、共通の国民文化を形成するにあたって政治的なものによりウェイトが置かれなければならないものの、他面では国民の文化的な多様性が可能な限り尊重されなければならないであろう。というのも自我なるものが他者との不断のコミュニケーションによって形成されてくるとしたならば、基本的な価値を共有する文化的な同胞は、個々人にとってすこぶる重要な役割を果たしているからである。じっさいのところ、そうした文化的同胞は、そうでないものと比較して相手の行動が予測可能であるゆえに、彼らとのコミュニケーションはより容易である。また言語の共通性は、良好なコミュニケーションの前提をなし⁽⁵³⁾ている。

それに加えてここでは、昨今の新古典派的政策に対して再考を加える必要があることを強調しておこう。というのもこうした政策には、経済的な効率を追求するあまり、それがもたらす政治社会的な影響を等閑視する危険が秘められていたからである。「通常の状態では、市場は社会生活の中に組み込まれている。市場は中間に存在する機関によって規制を受け、社会的通念や暗黙の了解によって妨害される。これらの中間的な機関の中では、労働組合と専門家からなる諸団体が個人と市場の間に立つ存在として長い間中心的なものだった。自由市場の構築は、これらの社会組織を弱体化するか破壊することを要求する。これらは、普遍的な消費者の前に立ちはだかる特定の生産者の利益として否定されなければならぬのである⁽⁵⁴⁾」とジョン・グレイは書いている。それは社会のなかに張りめぐらされた絆を切断することによって、純経済的な効率に依拠した市場を、社会のなから取り出して再構築しようとするものである。しかしこうした絆の切断とは、とりもなおさず個々人と「民族」とを無媒介的に直面させることを意味している。しかも中間的な集

団は、身近な問題に引きつけて政治を理解する場を人々に提供する点で、バランスのとれた判断力を養成する契機を秘めるものである。そうであるとするならば中間的な集団が破壊されるとき、ナショナリズムやエスノ・ナショナリズムが登場してくる可能性が増大してゆくばかりでない。さらにそこで展開されるナショナリズム、エスノ・ナショナリズムもいきおいデマゴーギッシュな様相を帯びてくるであろう。

それではこうしたナショナリズム、エスノ・ナショナリズムが暴発したとき、どのように対するべきなのか。一九八〇年代、九〇年代に世界を揺るがした様々な紛争の事例研究を踏まえつつローランド・パリスは、興味深い考察を加えている。パリスによればこうした民族紛争に対する当時の国際社会の処方箋は余りにも楽観的なものであり、戦火が収まって後、可及的速やかに民主主義を導入せんとするその政策は、失敗するべく運命づけられていた。というのもたしかに民主主義は敵を抹殺する代わりに頭数を数えることによって、政権の平和的な移行を保障するものの、他面では選挙戦の過程でかつての蛮行と共に民族的な憎悪が掻きたてられるとき、民族的な和解は暗礁に乗り上げてゆくことになるからである。また民主主義と同時に導入が主張されている経済自由化も、多くのところで貧富の格差を拡大することによって、人々の不満を昂じさせてゆくものである。そればかりか貧困がある特定の民族に集中するとき、沈静化した民族的憎悪を再燃させてゆく危険が秘められているであろう。

パリスによれば、こうした危険が生じてくるのは、民主主義⁽⁵⁵⁾といい、さらには市場経済といい、いずれも競争ないし闘争に依拠した体制であるからにはかならない。換言すれば政治的・経済的な競争ないし競争がある限度内に抑えられてこそ、民主主義と市場経済が平和と繁栄をもたらすこととなるものの、これらは民族紛争によって引き裂かれ、その記憶が未だ生々しい社会にはとうてい期待し得ないものである。またパリスは、民族的な和解達成の困難さを強調するあまり、分離・独立にのみ可能な処方箋を見出す見解に対しても慎重な留保を付け加えていた。というのもそうした施

策は民族間を分けるはつきりとした境界線が存在して始めて実施しうるものである以上、民族混住地域にあってはそれに備えて民族構成を単純化するために、民族浄化を引き起こす誘因となるからである。⁽⁵⁶⁾

こうした観点を踏まえてパリスは、選挙や経済自由化が導入されるより前に、人々の不満を沈静化するために確固たる統治組織を再建する必要性を力説する。それは腐敗なき法制度と官僚制度であり、それらには貧富の格差の増大を抑制し、選挙の腐敗を監視し、そしてなによりも民族的な憎悪を煽る言説に目を光らせ、そうした言説を撒き散らすテレビや新聞を検閲する役割が負わされている。⁽⁵⁷⁾ この意味でパリスの構想は、漸進的な民主化・経済自由化プランであり、妥当な処方箋とみなし得るものの、しかしこうしたプランの実施が、当面の混乱の回避には役立つとしたところで、かならずしもそれが真性の社会秩序の回復とは同義でないことをここでは強調しておこう。というのも社会秩序を回復するためには、住民相互間に最低限の信頼が必要とされるが、こうした信頼は、ひとたび破壊されるや、その再建は至難のわざであるからである。とくに「民族浄化」の地獄の業火を目の当たりにし、子供や親、夫や妻を——ときには自身自身の目の前で——虐殺された人々にとって、かつての「敵」との和解は至難のわざである。また和解実現のためには、いずれの陣営も過去と誠実に向き合うことが必要であるが、しかしかりに事実関係が確定しえても——それすら困難である——事実に対する解釈は様々にたてることが可能である。例えば旧ユーゴスラヴィアの内戦では、民族浄化の犯人としてセルビア人が槍玉にあがっているものの、しかしクロアチア、ボスニア・ムスリムもまた残虐行為をなしたのは事実である。そればかりかクロアチア、ボスニア・ムスリムが、国際世論を味方につけるために、セルビア側の残虐行為をわざと手をこまねいて放置していた事実があるとするならば、⁽⁵⁸⁾ 罪なき犠牲者という彼らのイメージは、色あせてゆくこととなるであろう。

いずれにせよ歴史的事実はともかく、その解釈について一致をみることはきわめて困難であり、ましてやそれに対す

る道義的責任に関して一致をみることはありえない。そうであるとするならば和解達成のためには、ゲルナー＝ルナンがいうように「忘却」こそが唯一の途であろうが、忘却するためには数世紀が必要とされる一方で、その間に勃発する民族抗争で繰り返される殺戮は、武器の性能が向上したため、かつてとは比較にならない規模に達している。

そうであるとするならば必ずすべきは、民族紛争を未然に防ぐことである。そして民族紛争が、人々をつなぎ止める、民族以外の絆が切断されたところでこそ勃発するとしたならば、民族紛争が猖獗をきわめる以前に、そうした絆を樹立し、それを維持・存続させることであろう。

この点でインドにおけるヒンドゥーとムスリムとのコミユナル対立を詳細に分析したA・ヴァルシュニーの研究は示唆的であろう。ヴァルシュニーによれば、たしかにヒンドゥーとムスリムとの対立・抗争は、近・現代インドの宿痾ともいべきものであったが、しかしある都市がコミユナル騒擾に繰り返し襲われ続けたのに対して、他の都市が独立以降、そうした騒擾とは無縁であり続ける等、その発生には都市によって顕著な違いが認められた。それはムスリム人口の多寡によるものでもなければ、歴史的経験によるものでもなく、当該都市の政治・社会的状況に規定されたものである。すなわちインター・コミユナルな政党組織、労働組合、ソーシヤル・ワーカー組織、商工会議所組織が存在していた都市は、たとえ全国的にコミユナル騒擾の嵐が吹き荒れていた場合でも、当該都市に関する限り、平和裡に共存してきたものである。それに対して以上のような組織が存在しないとき、あるいはかつて存在したもの、時の流れのなかで風化してゆくとき、当該都市は繰り返しコミユナル騒擾に悩まされることとなったのである。

それは前者にあつては、インター・コミユナルな組織が、抑制効果を発揮したためにほかならない。たしかに全国的にヒンドゥーとムスリムとの対立が高まるとき、緊張はこうした都市にも伝播し、両コミユニティの間に息詰まるような緊張感が走ったばかりか、随所に小競り合いが生じたことは事実である。この意味でこれらの都市も無気味な火種

をかくえていたが、しかしながらそれらが凄惨な殺し合いへと発展することを、以上のようなインター・コミユナルな組織が阻止することとなったのである。⁽⁵⁹⁾

いずれにせよ以上の事例が教えることは、宗派、民族を横断する政治・社会的な絆こそが紛争を未然に防ぎ、あるいはそれが爆発するのを抑制する上で、決定的な役割を演じていたこと、これである。この意味で共産主義が解体して以降、中・東欧、旧ソ連のあちこちで熾烈な民族闘争が燃え上がったのも、その一因は、共産主義体制下で、こうした政治的、社会的な絆の構築を阻止せんとして、当局が目を光らせていたがためである。またたとえ比較的自由であったユーゴスラヴィアのように、そうした繋がりが存在していたところでも、それらが共産党のお墨付きを得て形成された、多分に官許的なものであり、したがって共産党の解体と共に、それらもあえなく潰え去っていったがためである。

それに対してポーランドやハンガリー、あるいはチェコ・ソロヴァキアのようにソ連支配に果敢に抵抗したところでは、そこに培われた秘密のネットワークは強力で、それが共産主義解体後の民族紛争の噴出を抑制する上で、無視し得ぬ役割を果たしていたといえよう。⁽⁶⁰⁾

いずれにせよ民族間の紛争が激化し、互いに殺戮を繰り返すといった段階に達してしまうや、それらを平和的に解決することは、至難の業である。しかも昨今、こうした民族紛争には国際秩序の根幹を揺るがす由々しき危険が秘められるようになってきた。というのも近年における武器やコミュニケーションの発達には目覚ましいものがあり、局地的な紛争や不満、あるいは世界の辺鄙な地域に巣くう武装組織が国際政治の中枢部を直撃する可能性が、ますます高まってきたからである。いまさら改めて述べるまでもなく、二〇〇一年の世界貿易センタービル、ペンタゴンへのテロ攻撃は、アフガニスタンという、いうならば「見捨てられた」地域を根城としたアルカイダによって企てられたものである。この意味でこのテロ組織そのものは、まさに世界の辺境で成長をとげてきたものであったが、彼らのテロ攻撃は、

超大国アメリカの政治経済の中枢を直撃し、その衝撃はなまなましいテレビ映像を介して、世界の隅々まで波及してゆくこととなったのである。もっともこのテロ攻撃が世界政治の在り方を根底から塗り替えたとする議論には異論があるかもしれないが、しかしそれがテロの威力を見せつけ、アメリカのアフガニスタン、イラクへの攻撃を誘発することによって、中東地域を不安定化したことは否めない。そしてこうした一連の動きの結果、中東地域一帯が反アメリカないし反西欧の志向を強めてゆく一方、内戦しながらの様相を呈してきたイラク情勢に刺激されてイスラム陣営内部でもシーア派とスンニ派の抗争が、国境を越えて拡大してゆくとき、世界は統御不能な危機に直面するとみなして過言ではなからう。

そうであるとするならば、こんにちにおけるナシヨナリズム、エスノ・ナシヨナリズムの動向を真摯に受け止め、その暴発を可能な限り防ぐことが肝要である。もとよりこうした課題はきわめて困難であるものの、ここでは社会の中に張りめぐらされた様々な政治社会的絆を活性化する必要性を強調しておこう。というのも昨今、支配的となった新古典派的戦略は、市場に過度の信頼を寄せるあまり、他の政治的・社会的配慮を等閑視しがちであるからである。この戦略によれば市場とは、豊かさの源であるばかりでなく、社会諸集団相互間の共存を保障するシステムにはかならない。しかしこれまで見てきたように、こうした施策には致命的な欠陥が宿されている。それは国内の中間的な諸集団を掘り崩すことによって、デマゴグが跳梁跋扈する危険を宿すものである。それと同時にそれは異民族間の対立を煽り、各地で民族紛争を引き起こす契機を秘めたものであったのである。

注

(51) ホブズボウム、前掲書、二二七ページ。しかもホブズボウムはグローバル時代のこんにちの状況を次のように指摘した。

「もし悪巧みをする外国人がいないのであれば、彼らを作り出す必要があろう。しかし千年紀の終わりにあたって、彼らが作

り出される必要性はほとんどない。彼らは公共への危険、汚染の源として、私たちの町の中のいたるところに存在し、容易に識別できる存在であり、私たちの境界線と制御を超えたいところにいるが、私たちに対して嫌悪感を示し、陰謀を企んでいる存在である。」同、二二五ページ。

- (52) John Stuart Mill, *Representative Government*, in Mill, *Utilitarianism, Liberty and Representative Government* (Everyman's Library, London and New York, pp. 363-364. なおハンス・コーンは、こうしたミルの言葉を引きつ、ルナンやクレマンソーの「ときブリュターニュー人がフランス国籍を有していたことは、フランスのみならず人類にとって利益となったと断じているが（ハンス・コーン、長谷川松治訳『民族的使命』みすず書房、一九五三年、四五―四六ページ）、彼らの同時代人としてウエルズ人ロイド・ジョージの存在も指摘することができるであろう。

- (53) こうした問題に関しては多くの研究がなされているが、ちよあたった Cf., Will Kymlicka, *Multicultural Citizenship*, Oxford, 1995, Bkhu Parekh, *Rethinking Multiculturalism: Cultural Diversity and Political Theory*, Harvard University Press, 2000.

- (54) ジョン・グレイ、石塚雅彦訳『グローバリズムという妄想』日本経済新聞社、一九九九年、三八ページ。なお訳語は若干改めた。Cf., John Gray, *False Dawn: The Delusion of Global Capitalism*, London, 1998, p. 26.

- (55) Roland Paris, *At War's End: Building Peace after Civil Conflict*, Cambridge University Press, 2004, pp. 151-178.

- (56) *Ibid.*, p. 184.

- (57) *Ibid.*, pp. 185-211.

- (58) こうした記述はこの内戦を扱った書物の随所に見られるが、特にセルビアとクロアチアとが激しく戦い、ついに陥落したクロアチアの町ヴコヴァルに関して指摘されている。すなわちセルビアはこの町に対して飛行機も動員して大規模な攻撃をしたが、それに対してクロアチアの当時の大統領ツジマンは、自分たちを犠牲者に仕立て上げ、国際社会のサポートを得るために援軍を送らなかつたと報告されている。Sliber and Little, *op.cit.*, pp. 177-178.

- (59) Cf., Ashutosh Vatshey, *Ethnic Conflict and Civic Life: Hindus and Muslims in India*, Yale University Press, 2002. 例えば北インドのアリーガルは、度重なるコミュニケーション的騷擾に見舞われたが、そこではインター・コミュニケーション的な組織は存在せず、社会生活のレベルでヒンドゥーとムスリムとが食卓を共にすることもなければ、互いに訪問し合うこともそれほど頻繁にみられない。それに対してインドの西海岸に位置するカリカットは騷擾とは無縁であったが、そこでは——ポーターを含めて——労働界、商

工会のいずれの分野でもインター・コミユナルな組織が確立されていた。また隣り組もインター・コミユナルな構成をとっており、両宗派間に緊張がはしったとき、ボヤのうちに消しとめるにあたつて重要な役割を演じていたのである (ibid., pp. 119-148)。したがってインター・コミユナルな組織が弱体化するとき、かつてはコミユナル騒擾と無縁であつた都市も、繰り返し暴動に見舞われることとなる。例えばグジャラートの州都アーメダバードは、郊外のサーバルマティにアシュラムを構えるマハトマ・ガンディーの活動拠点であり、したがって印パの分離独立に際してムスリムの攻撃目標になったものの、しかしそうした企ては成功しなかつた。というのもアーメダバードでは、インド国民会議派、ガンディー主義者からなる社会奉仕団体、商工会議所、労働組合が、インター・コミユナルな確固たる組織を構成していたからである。他方、インド国民会議派に対してヒンドゥー原理主義にたつインド人民党が、ガンディー主義者の奉仕団体に代わつてインド人民党支配下の奉仕団体を台頭させたとき、以上のような状況は大きく変貌してゆくこととなる。それに加えてインドのマンチェスターとして、かつては盛況を誇つた綿工業が衰退してゆく一方で、中小の新興企業が台頭し、それらに対する商工会議所の統制がきかなくなるばかりか、そこで働く労働者も労働組合に組織されなくなるにつれ、アーメダバードを取り巻く状況の変化にはより一層の拍車がかけられることとなったのである。こうした動きは七〇年代以降、徐々に進行してきたが、八〇年代になるとインター・コミユナルな組織の凋落は、もはや押し止めがたいものとなる。それと同時にかつては平和を誇つたアーメダバードも、コミユナル騒擾の頻発に悩まされるようになってきた。じじつ八〇年代から九〇年代初頭を取り出した場合、八二年一月、八四年三月、八五年三月から六月、八六年一月、三月、七月、八七年一月、九〇年四月、一〇月、十一月、十二月、九一年一月、三月、四月、九二年一月、六月と繰り返し騒擾に襲われ、その過程で多くの人命が失われてゆくこととなったのである (ibid., pp. 222-261)。

(60) 例えはチェコとスロヴァキアは一九九三年に平和的に分離したが、スロヴァキアの度重なる自治ないし独立の要求に手を焼いたチェコ側が、最終的には分離に積極的になった点で、セルビアあるいはクロアチアとも決定的な違いをなしている。その原因は多様であろうが、ソ連に対する抵抗とその中で培われた経験、ネットワークが大きな役割を演じていることは否めない。Cf. Janusz Bugajski, *Nations in Turmoil: Conflict and Cooperation in Eastern Europe*, 2nd ed., Westview Press, 1995, pp. 66-76. なおいま一つの原因として、ヨーロッパ共同体へ参加するためには、人権擁護、多元的デモクラシー、市場経済という三条件を満たさなければならず、そのことが分離に伴う暴力の回避に役立ったことがあげられる。